ベストピア Bestopia
第451号
2024年9月号
bestopia.jp
パリ通信
第153号

人類はスピードについていけるか？

⑴老化のスピード

8月の下旬にNHKで放映された老化には二つの断層があるという番組をしみじみと共感して見た。おおよその内容は老化は年齢に比例的にやってくるのではない。二つの断層がある。それは42歳と64歳だということであった。（この年齢の記憶はあやしい）二つの断層で急激に変化が現れることが実験で証明されたという。なるほど、それは経験的実感通りで何も新しいことではないと思う。ただ違うことは実験で証明されたが故に科学的に語られるということだ。この実験の母集団は75歳迄の男女ということで80歳は対象になっていない。ましてや平均寿命年齢を過ぎた者の老化は研究の対象にはならない。そこで経験的にしか言えないのであるが82歳も第三の断層になるのではないかと思う。

先月のベストピアで誕生日は何か新しいことを始める契機となると記したが、私の場合、確実に言える変化がある。8月18日私たち夫婦は今の住まいのある「山の家」を降りることを決断した。8月24日には新しい賃貸マンションの契約をした。スピード感のある我々の特徴を遺憾なく発揮した。しかし、それから先の判断と行動が混乱して超スローの歩みとなった。「思うように動けない」のである。ダンボールは発注したが、そこに詰めることが億劫うになり足踏みをしてしまう。超疲労感に襲われる。私個人にとっては判断力が殆ど働かないか判断が間違っている。新しいことをするには83歳の壁を越えねばならない第三の断層かも知れない。人によって異なるので±3歳として幅を持たせて考えてみることはできないだろうか。以上は個人的な話である。世界はどうか。どうも私には分からないところで超スピードの変化が毎日進んでいるようである。

⑵テクノロジーのスピード

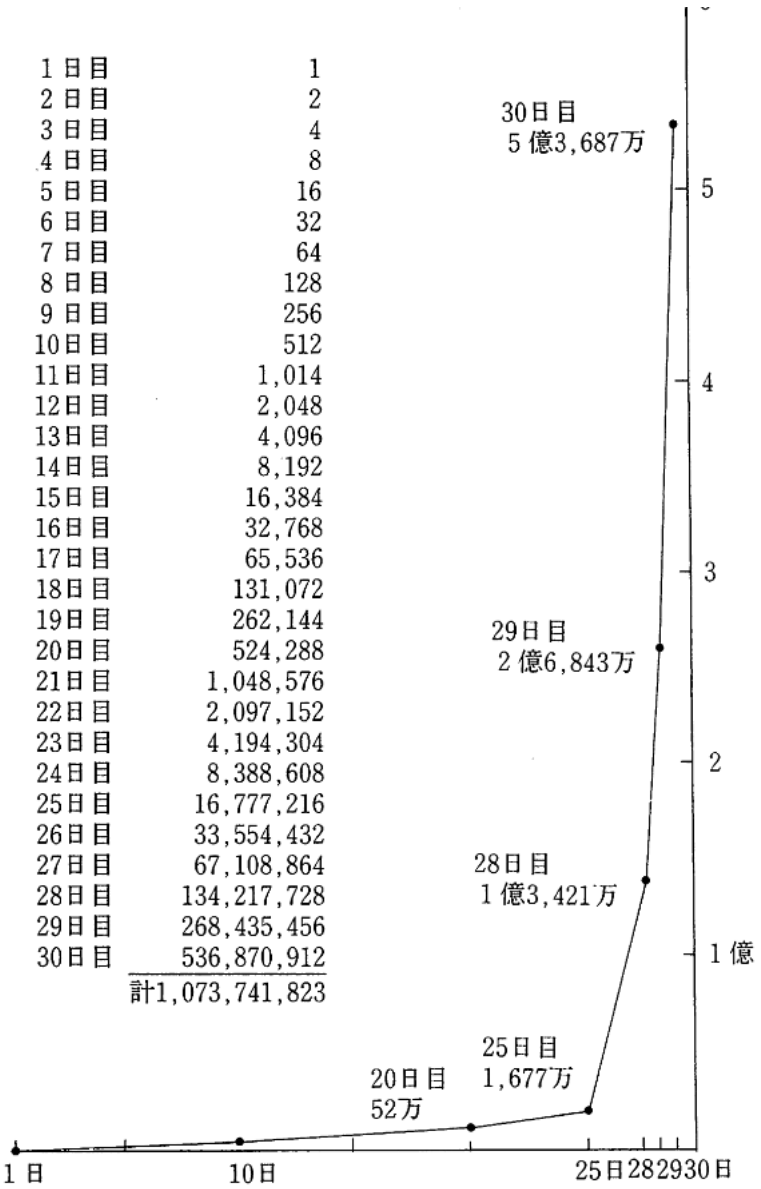
進化するテクノロジーという言葉が普通に用いられている。その内容を調べてみたら
AIとARとの融合（コンバージェンス）が急速に進んでいるということ。
AIについてはベストピア第410号（2021年4月号「クララとお日さま」）で紹介済みであるが、改めて辞書らしきものを紐解くと「人工的に作られた知能、自ら学習し分析や提案ができる。例えば自動車の自動運転等。Artificial Intelligenceの略である。
ARとはAugmented Realityの略で「仮想空間の情報やコンテンツ（内容・概念）を現実世界に重ね合わせて表示することにより、現実を拡張する技術や仕組み」のこと。
AIとARが融合することで、例えば空飛ぶ自動車が実現可能になっている。それも今眼前であるらしい。この二つの融合は進化を指数関数的に変化させると言われている。

指数関数的変化については「一文倍増三十日」という面白い昔話がある。話をわかりやすくするために一文を一円としてその話を紹介しよう。

⑶一文倍増三十日のスピード

昔、ある大金持ちが、日頃よく仕えてくれる利発で正直者の奉公人に
「お前の真面目な仕事ぶりが気に入った。今日はお前に望みのものをあげることにしよう。なにか欲しいものがあったら、遠慮なくいってごらん」と言った。
奉公人は、「とんでもない、いまの待遇で十分満足しております。」と強く断ったのであるが、
「遠慮はいらん」とあまりにも言われるものだから、
「では、今日、一円ください。明日は前日の2倍の二円をください。
そのように前の日の2倍のお金を、30日間に限って、毎日くださいませんか」と言った
その大金持ちは10日迄を計算してその金額が512円であることを知った。
大した金額ではないと思った大金持は、簡単にこの申し出を約束し、早速その日から実行することにした。
しかし、大したことはないと思った金額も、20日目を過ぎた頃から急に大きくなることに気づき、慌てて計算してみて、
さすがの大金持ちもびっくり仰天してしまった。
図に示されているように、なんと30日目の総計では、10億7000万強の金額になることが分かったからである。そこで、大金持ちは奉公人に手をついて謝り、30日間の約束を20日目で解消してもらったという話である。
この話とグラフから現在は25日目辺りかも知れない。

1日目	1
2日目	2
3日目	4
4日目	8
5日目	16
6日目	32
7日目	64
8日目	128
9日目	256
10日目	512
11日目	1,014
12日目	2,048
13日目	4,096
14日目	8,192
15日目	16,384
16日目	32,768
17日目	65,536
18日目	131,072
19日目	262,144
20日目	524,288
21日目	1,048,576
22日目	2,097,152
23日目	4,194,304
24日目	8,388,608
25日目	16,777,216
26日目	33,554,432
27日目	67,108,864
28日目	134,217,728
29日目	268,435,456
30日目	536,870,912
	計1,073,741,823



⑷ゆでガエルのスピード

今世界で起こっている毎日目にする報道は二つの悲惨な戦争と政治家の喜劇である。
いずれにも共通することは平和がないこと。しかし、多くの人々は安穏と暮らしている。
当事者ではない安穏組はこのグラフでいうと15日から20日の間であるように私は思う。
要するに多くの人々は「ゆでガエ

ル理論」の中にいるということ。
「ゆでガエルの理論」とは、ゆっくりと進行する機器や環境変化に対応することの大切さ、難しさを戒めるための話の一種で、主に企業経営やビジネスの文脈でよく用いられている。カエルを熱湯の中に入れると驚いて飛び出す。しかし常温の水に入れて、徐々に熱するルと、カエルは、その温度変化に慣れていき、生命の危機と気づかないうち死んでしまうと言う話。理論といっても、実際は科学的にも誤りであることがわかっているが、経営者や、経営コンサルタントなどによってまことしやかに語られてきた。すでに1つの教訓として定着している。

悲惨な戦争と政治家の喜劇の行き着くところが、どこか？

AIもARも人間が便利さを追求する過程で作った技術、その行き着くところはどこか？

人類はそのスピードについていけるか？

私は行き着くところは同じかも知れないと思う。

2020年東京パラリンピック大会(実施は2021年)「幅跳び」(片脚義足クラス)で銀メダル取得
フランス代表マリーアメリー・ル・フュール選手

パリ通信・第153号

パラリンピックの歴史

2024年パリ・オリンピック(7/26-8/11)、パリ・パラリンピック(8/28 -9/8)が終った。
準備期間からテロ対策、交通規制、QRコード申請など混沌としたパリだったが、長かった夏休みも終わり、9月の新学期が始まりようやく落ち着いた日常生活に戻った。

オリンピックはロンドン、東京、パリ、次回はロサンゼルスと経済力のある都市が持ち回るコマーシャル・イベントと化している。巨額の資金を投入して大きな建造物を建て、国威を争うオリンピックを今日なお続けることに疑問を持つ人も少なくない。スポーツを通して世界の平和を目指すことに異論はないがオリンピック運営の在り方を原点に戻って考え直して欲しいと思う。そんな中パンテオンで『パラリンピックの歴史・スポーツによる統合から社会復帰へ』と題した展示会(2024年6月11日から9月29日まで)が開催されている。

ルイ15世が建築家ジャック・ジェルマン・スフロ(1713-1780)に建てさせた教会が1789年フランス革命時にフランス共和国に尽くした偉人たちを記念する霊廟となり、19世紀、20世紀、21世紀フランスの歴史を象徴する場となっている。1829年「点字」を考案したルイ・ブライユ(1809-1852)もパンテオンに永眠している一人だ。自身も全盲で、アルファベットを6つの点の組み合わせで表わす「ブライユ点字」を発明し世界中の視覚障害者に貢献した。

第一回「パラリンピック」が開催されたのは1960年「ローマ大会」17ヶ国209名の選手が参加した。競技種目は「陸上」「車椅子バスケットボール」「車椅子フェンシング」「水泳」「卓球」「アーチェリー」「スヌーカー」「ダートボード・アーチェリー」の8つ。「パラリンピック」の先駆けとなったのは1948年イギリス、ロンドン郊外の町「ストーク・マンデヴィル (Stoke Mandeville) 」病院で開らかれたスポーツ大会である。第二次世界大戦は多くの身体障害者を生んだ。イギリス脳外科医ルートビッヒ・グットマン(1899-1980)が半身麻痺や四肢切断など身体障害者のリハビリ治療としてスポーツを導入することを提唱した。グットマンはドイツのユダヤ人家族に生まれ、1939年イギリスに亡命、医師としてストーク・マンデヴィル病院でスポーツ治療を実践した。1950

年からは他国の障害者も招き「ストーク・マンデヴィル大会」が毎年病院で開催された。大会の目的は「世界の麻痺患者を集めて国際的なスポーツ運動を行うこと、真のスポーツマンシップ精神は彼らに希望とインスピレーションを与えてくれるだろう。彼らがスポーツを通して他国民との友情、理解を深める手助けをすることが最も優れた社会貢献である」とその意義を明確に提唱した。
イタリアのローマ郊外でも脳外科医アントニオ・マリオ(1912-1988)が同様の麻痺患者リハビリ治療を実践しており、二人の脳外科医の尽力で「ストーク・マンデヴィル大会」の精神は1960年「ローマ・パラリンピック」へと大きく進展する。

1964年「東京パラリンピック大会」に参加したフランス選手団

1964年「東京パラリンピック大会」には20ヶ国266名が9種目に参加、フランスからは20名、全員車椅子だった。パラリンピックを象徴してきた「車椅子」は科学の進歩とともに格段の進化を遂げ、身体障害者の足となりスポーツを可能にしている。ローマ大会から64年経ったパリ・パラリンピック大会には182ヶ国4400名のパラアスリートが22種目に参加するまでに成長した。身体障害、精神障害、障害の程度や種類に対応する平等なクラス分けが行われ、競技種目も増えつつある。パラスポーツと医学・科学はその原点から結びついており、弱者の希望の道を開くという点においてオリンピックより人間らしいと思う。
パリ・オリンピック、パラリンピックが終わってパリ市はもちろんその成功を強調するが、パリは障害者に適した都市とは言えない。パリのメトロにはエレベーターがないから車椅子では乗れない。停車駅のアナウンスもないので視覚障害者は電車が止まる回数を数えて降車駅を確認しなければならない。日常の至るところで障害者には困難であろう状況に出会う。弱者を排除しない社会を作るには彼らの視点で物を見ることがとても大切だと思う。オリンピックは競争であり、特に近代オリンピックは超人的な身体能力、絶えず更新されていく記録や技を追いかけ続けなければならない。絶えず勝ち残らなければ敗者となり、普通の人が自己投影できる世界では到底ない。その点自己のハンディを受け入れ、そのハンディと闘う精神を問うパラリンピックには得るものが大きいと思う。